尋常小學國語讀本

文部

卷六

K1
M
10023

小學常識國語讀本文部

卷六

交通部 圖書館藏書 許可證

もくろく

第一　俵の山 …… 一
第二　日本の高山 …… 四
第三　ヤクワントテツビン …… 九
第四　きのこ取 …… 十四
第五　海
一　しけ …… 十九
二　なぎ …… 二十
第六　くりから谷 …… 二十二
第七　霜 …… 二十六
第八　虎と蟻 …… 二十七
第九　町ノ朝 …… 三十一
第十　弓流し …… 三十四
第十一　入営した兄から …… 三十八
第十二　笑ひ話 …… 四十三
第十三　鮭 …… 四十五
第十四　冬の夜 …… 四十八
第十五　萬じゆの姫 …… 五十
第十六　磁石 …… 六十四
第十七　けんやくと義捐 …… 六十六
第十八　賀茂川 …… 六十九
第十九　メリンス …… 七十四
第二十　氷すべり …… 七十七
第二十一　神風 …… 七十九
第二十二　象 …… 八十五
第二十三　千早城 …… 九十
第二十四　記念の木 …… 九十八
第二十五　芽 …… 百
第二十六　伊勢參宮
一　入營中の兄へ …… 百三
二　父から …… 百四

第一　俵の山

「今年はほんたうに年だ。今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。」

「さうです。新田が大へんよく出来ました。来年もやはりあの稲を作りませう。」

朝飯の時こんな話が出ました。今日はうちの者がみんなたんぼへ稲こきに行きましたおるす居はおぢいさんと私だけです。

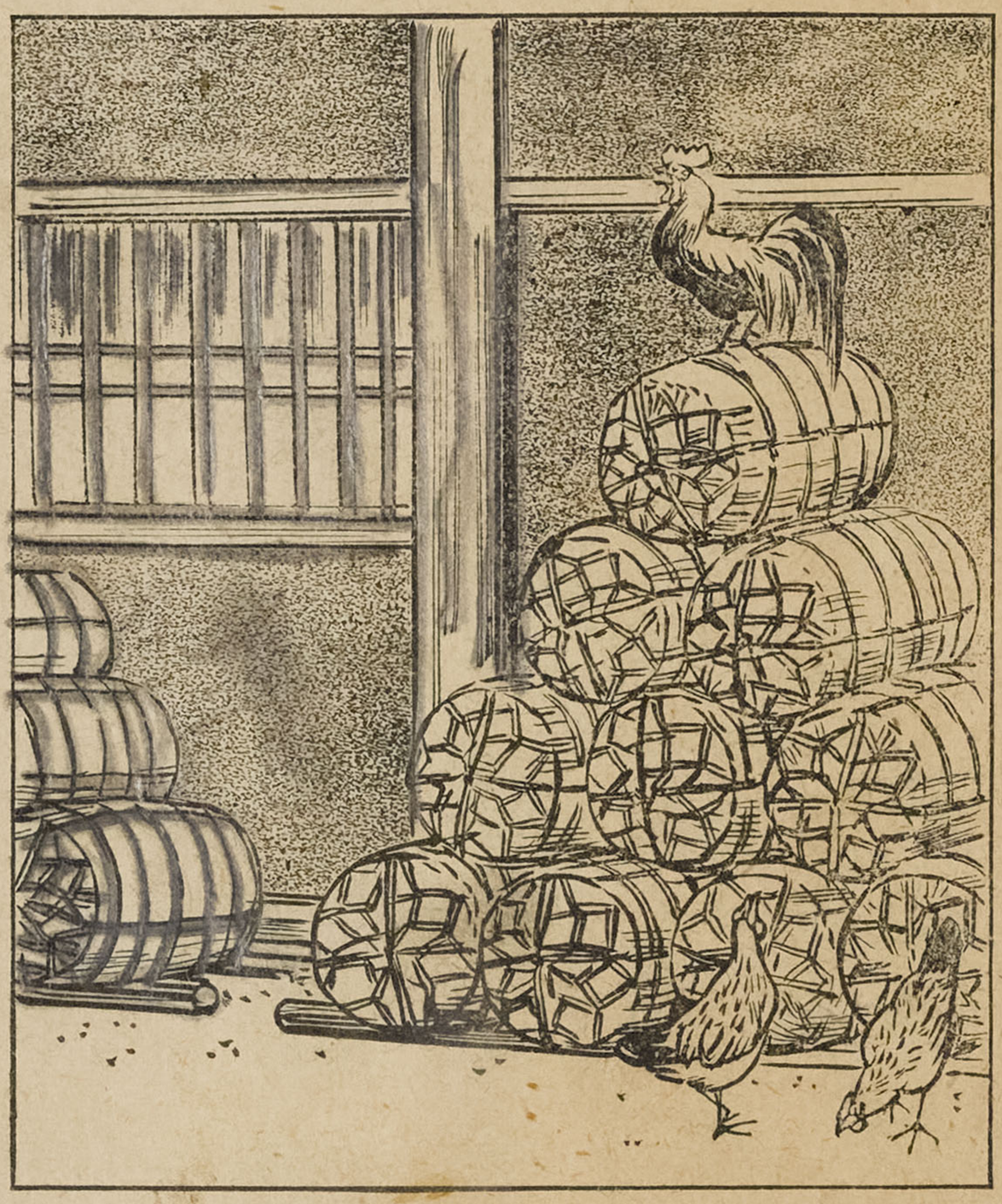
卵　俵　丸

おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしてゐると、卵買が来て、卵を七つ買つて行きました。

今どこのうちへ行つて見ても、俵の山が出来てゐます。うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。一番下は四俵、一番上は一俵で、一山は十俵づつです。

来る日までに二山出来て、もう三つ目の山が

湯



来上りませう。

私がたんぼへおだいさんが庭で腰をのばして、

おだいさんがお湯を持つて行つてみま

第一　俵の山

出来か、つてくると、

す。今日庭は

あるもみを

俵に入れて

ら、三つ目の山は出

國六

第二　日本の高山

山|　晩寒　　拾

拾「もうお晝かな。」
と拾おつしやいまし
き拾つてゐたにはし
を借りました。土間で
「朝」だとりが、俵の山
「に」晩めつきり寒く
いたらう。」なつた。高い
さん、富士山はまつ白でせ
ふじ
う」ね。

國六

「さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから」。

「それでは日本一の高山は」。

「臺灣（たいわん）の新高山さ。これは一万三千尺からある。臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山の山のいたゞきには、いつもつてゐるといふことだ」。

次



「一番は新高山、二番は富士山、三番目は。」

「いや、二番も三番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。」

「富士山の次は。」

「内地では甲斐の白根で、三千九百三米一万五百尺。」

「其の次は。」「信州（しんしう）の槍岳（やりがたけ）やら赤石山で、どれも一万尺以上ある。」

「外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。」

「印度（いんど）のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。しかし三万尺の山、高い山がかな

岡都

らず名高い山だとはかぎらない。奈良の春日山や三笠山は千尺そこ〳〵だが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。

ふとん着て、ねたるすがたや東山。

で、先づ高い岡だと思へばよい。」

「高くて名高いのは、どの山ですか。」

「それは富士山さ。」

金　　仲銅　　指

第三　ヤクワントテツビン

或晩人ガネシヅマツテカラ、金物屋ノ店デ、

ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒ

マシタ。先ヅヤクワンガ言ヒマス

「金ニハイロ〳〵アリマスガ、中デ一番人

ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デア

ラウト思ヒマス。

金ヤ銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指

ワニナツタリ、其ノ外イロ〳〵ナカザリ
物ニナリマスガ、ドチラモタクサンアリ
マセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。銅
ハソレニヒカヘテ、金ヤ銀ヨリモタク
サンアリマスカラ、シタガツテネダンモ
安ウゴザイマス。ソレデ、オアシナカザリ
トモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マ
ス。金ダラヒニモナレバ、私ノヤクウナヤク

鐵（鉄）

ワンニモナリマス。シテミレバ銅ホド役ニ立ツ物ハアリマスマイ。

テツビンハ「ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワカス私モ、私ノ乘ルゴトクモ鐵デス。其ノ

外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ造ルコトガ出來マセン。今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセン。人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

ヤクワンハ之ヲ聞イテ、

「ソレデモ鐵ハチキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ」。

ト言ヒマシタ。其ノ時鐵ビンハ
「私タチノサビルノハ人ガ使ハ
デス。モシセイ出シテ使ツテク
レバ、イツデモ光ツテ丹マス。銅
ハレテ丹テモ、時々青イ物ヲ出シ
レガヤハリサビデス。シカモ其ノサビハ
大ソウ毒ナ物デス。アノサビハ
ト言ツテ、中々マセンデシタ。
「ス。

第四　きのこ取

二三日降りつゞいた雨がからりとはれたので、昨日のお晝すぎ、にいさんと松山の入口で、赤くなつてるたぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を。」と、にいさんに注意されました。僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初

茸を五六本取つたやうでした。僕がきれいなきのこを取つて、にいさんに見せましたら、

「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其のきれいなきのこをたべてはいけない」。

と、にいさんが言ひました。僕はびつくりして、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。

それからにいさんと、ざふ木林へはいつて、

木住家落

じめ〳〵した落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

だん〳〵上つて行くと、

山の中でも、三軒家でも、

住めば都よ、わが里よ。

木びきの力藏さんがうたをうたひながら、大きなのこぎりで板をひいてゐました。何の木か、おがくづがほつてゐ大そうよくにほ

ました。にいさんが

「今日は。」

と言つて、

「此の近くに、しめぢの出る所はありませんか。」

とたづねますと、

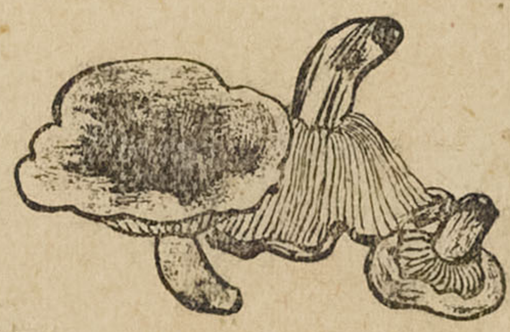
「さあ、まだ早いかも知れないがね。」



しめぢ



ねずみ茸



初茸

と言つて、栗林のくぼ地を教へてくれました。

行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふまないやうに注意して、かごに一ぱい取つて歸りました。歸りがけに、藏さんにお禮を言ひましたら、

「一雨降つたら、又お出で。」

と言ひました。

第五　海

一

鉛色の空は次第々々に低くなつて来ます。風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。うちよせて来る波は、岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きま

す。もとより舟はいそうも出てゐません。いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えません。冬時の海には、よくこんなことがあります。

こんな時には、

「これが五日もつづくと、ひぼしだ。」

と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

二　なぎ

空もみどり、
海もみどり、
空につゞく海のみどり、
海につゞく空のみどり、
すみきつて、
かゞみとかゞみ。
沖ものどか、
濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、
濱へ歸る父の小舟、
すれ合つて、
ゑがほと
ゑがほ。」

第六　くりから谷

木曽義仲が都へせめ上ると聞いて、平家は
あわてて討手をさしむけました。大將は平
維盛で、十万騎を引きつれて、越中の國の礪

波山（なみ）にぢんを取りました。義仲は五万騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のふもとにぢんを取りました。

兩方からおしよせて、ぢんの間が一里（丁）ばかりになりました。

其の夜のことです、義仲はひそかに味方の者を敵の後へまはらせて、兩方から一度にどつとときのこゑをあげさせました。

向

不

不意を討たれた平家方は、上下への大さわぎ、弓を取つた者は矢を取らず、矢を取つた者は弓を取らず、人の馬には自分が乗り、自分の馬には人が乗り、後ろ向に乗る者もあれば、一匹の馬に二



暗深埋命

人乘る者もあります。暗さは暗し、道はなし、平家方はにげ場がなくて、後のくりから谷へ、なだれをうつて落ちました。

親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、ずるぶん深いくりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

大將維盛は命からがら加賀（か が）の國へにげま

今朝霜菊

した。

第七　霜

今朝は大そう寒い。

屋根の上に霜がまつ白だ。

庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、

霜にあたつたからだらう。

うめもどきの實がいつもより目立つて見える。

ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。

第八　虎と蟻

大きな虎（とら）が山おくで、

『どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。』

とひとりごとを言ひました。其の時

笑程

「あはゝ。」

と笑ふものがありました。虎がしたが、だれも居ません。

『だれだい、今笑つたのは。』

「私です。蟻（あり）です。」

なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

「何で笑つた。」

『だつて分り切つた事でせう。人間があなた方を生けどりにしようとするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けはしません。』



食鼻

虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。蟻は虎の指のまたからくゞつて、仲間の者にあひづをしました。

さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。さうして虎の目・鼻・耳・口、所きらはず食ひつきました、頭のてつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

虎はうん〳〵うなつて、かけまはるより外、どうすることも出来ません。とう〳〵弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

第九　町ノ朝

一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。町ハマダヒツソリシテ、ネムツテヰタ。其所此所ニハトリノコヱガ聞エタ。

マツ先ニ出アツタノハ牛乳(ギウニユウ)配達(ハイタツ)デ、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。橋ノタモトニ人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ『ダンナ、マヰリマセウ』。

ト言ツタ。

東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見エルヤウニナツタ。カラノ荷車(ニ)ヲヒイテ行クノハ、八百屋(ヤホ)ヤサカナ屋デ、買出(カヒダ)シニ行クノラシイ。病院(キン)ノ

前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。少シ行クト、呉服(ゴフク)屋ノ小ゾウガ表ヲハイテ丼タ。自轉車(テン)ガ後カラ來テ、カケヌケテ行ツタ。豆腐屋ノラツパヤ煮豆(マメ)屋ノリンガ小路(コウヂ)ノ角(トウ)マデ聞エテ來テ、町ハダン〳〵ニギヤカニナツテ來タ。

停車場近クニナルト、急ニ人通ガ多クナツタ。ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカ

合戰

ラ汽テキノ鳴ツテ井ル工場ヘ急ゲグノデア
ラウ。
朝日ガパツト西ガハノ家ノガラス戸ニカ
ガヤイタ。
停車場デキツプヲ買ツテ井ルト、郵便物ヲ
ツンダ車ガ井セイヨクカケテ來タ。

第十　弓流し

屋島の合戰に、義經（よしつね）が小わきにはさんでゐ

落した弓を海へ落しました。

源氏の弓は潮（しほ）に引かれて流れて行きます。

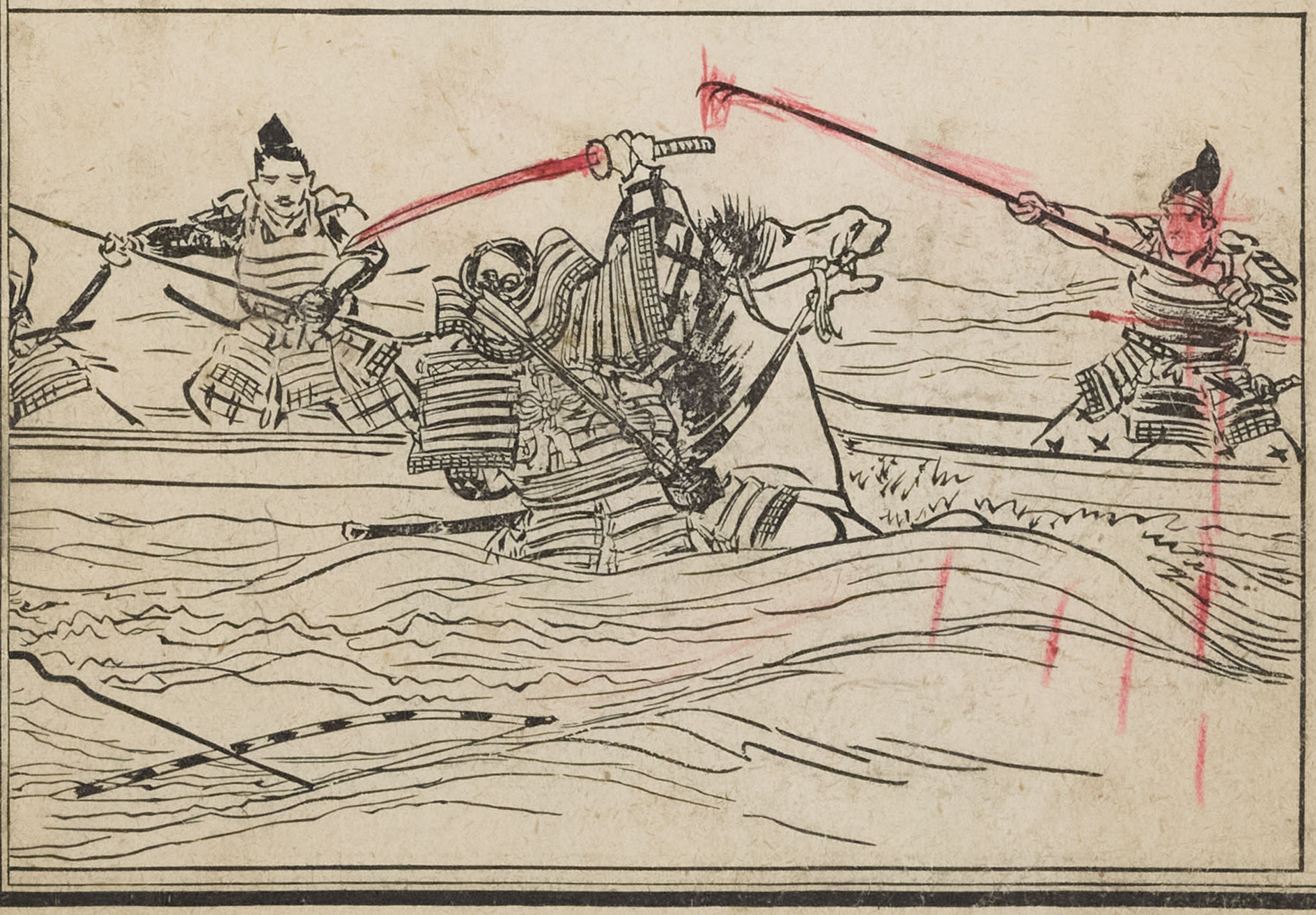
捨馬の上にうつぶしになつて、むちのさきでそれをかきよせようとします。敵は船の中から熊手（くまで）を出して、義經のかぶとに引つかけようとします。源氏の者どもは義經をかばひながら、

「捨ててておしまひなさい。」

陸　　太刀

「お捨てなさい。」と口々に言ひます。それでも義經は、太刀で熊手をふせぎ〳〵、とうとう弓を拾ひ上げました。

陸へ上つた時、家來が「たとひ金銀で作つ

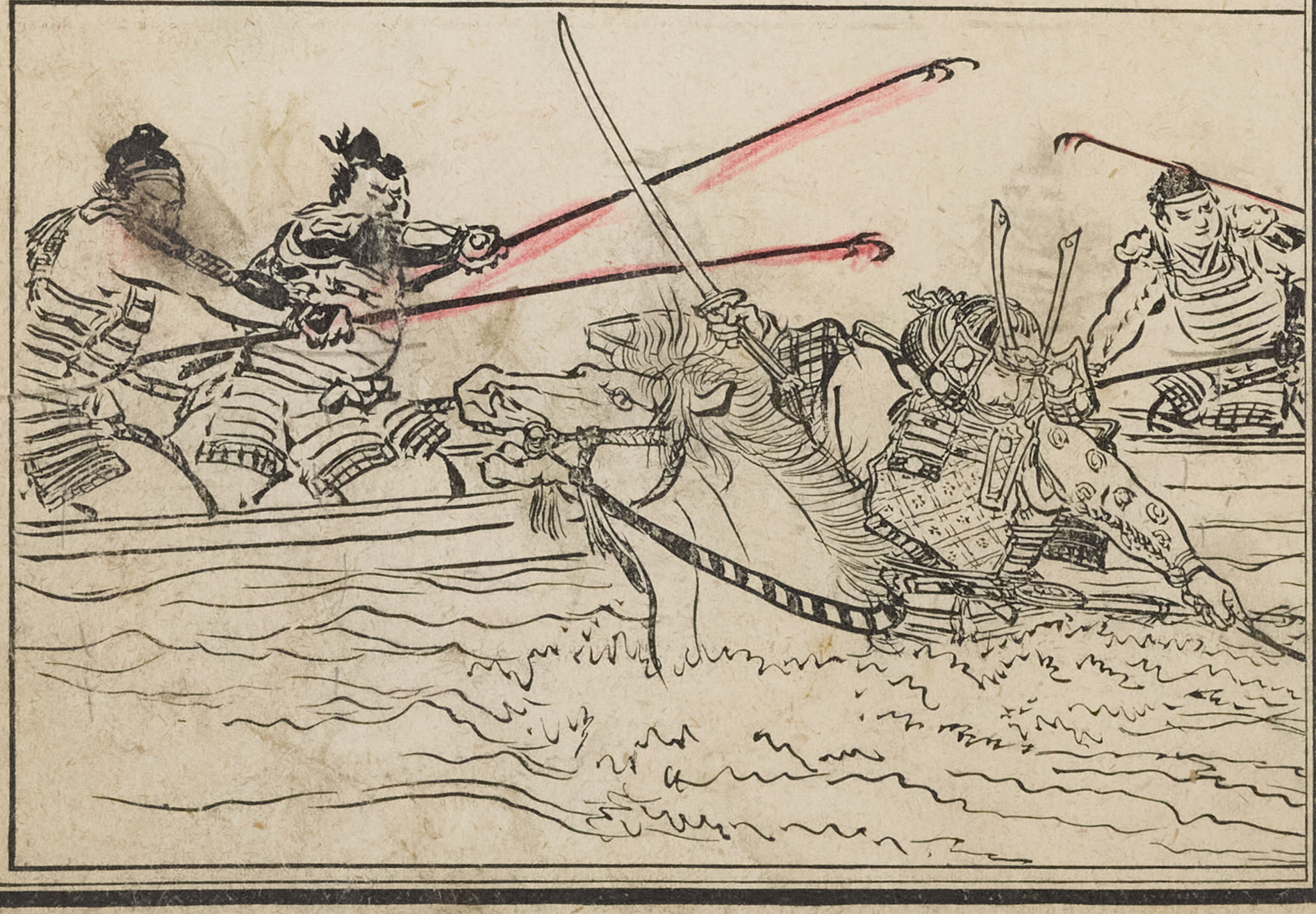


惜代

たゝ弓でも、御命にはかへられませぬ。」

と申しますと、義經は笑つて、

「いや〳〵、弓が惜しかつたのではない。叔父爲朝（ためとも）の弓のやうな強い弓ならば、わ



ざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。』なぞと言はれては、源氏の名折れになるからだ。」

と言つたと申します。義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戰にも勝つたのでございませう。

第十一　入營した兄から

國では初雪が降つたさうだね。こ

服　入營後　出　昨日　兵

つちは國よりよほどあたゝかだ。

洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

入營後はじめて此の前の日曜日に外出をゆるされた。昨日はとなり村から來てゐる歩兵の音吉君と二人で町を見物した。お前はな

砲

ぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、兵にならうが、砲・工・輜重（しちよう）の五種があつて、私の村から、今歩兵になつて来てゐるのは私一人だけなのだ。

正作君と大工の松さんは工兵、松君は砲兵、役場につとめてゐる騎兵、私を入れて

國六

各　　舍

村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふので、めつたに一しよになることはない。どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、ふしぎと私の村からは私一人だ。其り輜重兵の外は各種の兵がゐる。輜重兵にも其の中にだれか

出るだらう。分家の萬藏君などは小男だから、ひよつとすると輜重輸卒にあたるかも知れない。お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵になれるだらう。からだをぢやうぶにして、よく學問をべんきやうしなさい。軍隊へ來ても、學校でなまけてゐた者は

人一倍苦勞をする。其の中に又くはしい事を知らせよう。

十二月十五日　兄から

千太どの

第十二　笑ひ話

一

「海の上でも歩けさうだ。」

「どうして。」

沈理と雷同

「左足が沈まないまない中に左足を出す」。

「なるほど、理くつはさうだ」。

二

月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました」と言ひます。雷はかんしんして、

「あゝ、月日の立つのは早いものだ。自分は夕立にしよう」。

第十三　鮭

叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。

淺産穴

大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ来ルダン〳〵上ツテ来ル中ガ出ル程ノ浅イ所マデボツテ、時ニハセ上ツテ来ル。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ来ルノデアル。キレイナ水ガサラ〳〵流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中へ卵ヲ産ム。卵ハ小豆（アヅキ）程ノ大キサデ、

ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。一匹デ三四千粒モ産ムトイフコトデアル。産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセテ、外ノ魚ガソレヲ食ハナイヤウニシテ置ク。ソレカラ海へ歸ルノモアルガ、多クハツイデ死ンデシマフラシイ。

翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海へ行ク。四五年モタツト、大キク

ナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上ツテ来ルガ、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ来ルサウデ、「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタラヨカラウ」。ト叔父サンガ言ハレタ。

鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

第十四　冬の夜

ともし火近く

樂　勇

衣（きぬ）ぬふ母は
春の遊の
樂しさかたる。

居ならぶ子どもは
指を折りつつ、
日數かぞへて、
喜び勇む。

ゐろり火はとろく、



ゐろりのはた外は吹雪（ふゞき）。

に縄なふ父は

すぎしいくさの手がらを語る。

居ならぶ子どもはねむさを忘れて、

耳をかたむけ、こぶしをにぎる。

ゐろり火はとろ〳〵、外は吹雪。

第十五　萬じゆの姫

源頼朝（みなもとのよりとも）が鶴岡（つるがをか）の八幡宮（まんぐう）へ舞（ひめ）を奉納（ほうなふ）する事

になつて、舞姫（ひめ）をあつめました。十二人いるうち、十一人までは有りましたが、あとの一人がありません。こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。頼朝は一目見たと、萬じゆを呼出しましたが、かほも美しく、すがたも上品に見えましたので、さつそく舞姫にきめました。萬じゆは當年やうやく十三、

舞姫の中では一番年わかでございました。」

奉納の當日は、賴朝をはじめ、舞見物の人々が何千人ともなくあつまりました。一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には賴朝おもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひました。其の五番目の舞姫とい



の萬じゆの姫であつたのでございます。

翌日頼朝は萬じゆを呼出して、

「さて〳〵、此のたびの舞は日本一の出來。國はどこ、又親の名は何と申す。ほうびはのぞ

と
みにまかせて取らせるであらう」。
と言ひました。萬じゆはおそるおそる、
「べつにのぞみはございませんが、唐糸（からいと）の
身代りに立ちたうございます」。
はと申しました。之を聞くと、頼朝
にはさつとかはりました。かほの色
も道理、これ
まで頼朝が木曽（きそ）義仲をせめようとした頃、木曽

の家來手塚太郎光盛の娘が賴朝に仕へて居りましたが、之をさとつて、すぐ所へ知らせました。義仲からは折りかへし返事があつて、「すきをねらつて、賴朝の命を取れ。」と、木曽の家につたはつてみた大切な刀を送つてよこしました。

光盛の娘は其の後、夜晝賴朝をねらひましたが、少しもすきがありません。かへつて、は

だみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。頼朝は其の刀があつたのでございますさあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。唐糸といふのは此の女のことでございます。

唐糸には其の時十二になる娘がありました。これが萬じゆの姫で、木曽には住んで居り

ましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉（かまくら）をさして上りました。二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩きつゞけて、やう〳〵鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといのり、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつ

たのでございます。かげひなたなくはたらく上に、人の仕事までも引きうけるやうにしましたので、「萬じゆ〳〵」と、人々にかはいがられました。

さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても、母の名をいふ者があつてもも二十日たつてもも、母はもう此の世（よ）の人ではなりません。あゝ、母は

いのかと、力をおとして居りました。

或日のこと、萬じゆが御殿のうらの氣もなくあたりをながめて居りますと、下仕の女が來て、「あの門の中へ出て、何なりませぬ。」と申しました。わけをたづねますと、

「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

と答へました。之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございませう。三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少でございます。萬じゆはお其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。八幡様の御引合はせか、門戸は細めにあいて居りましたうばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりました。月の光

にすかして、あ
の一むら立つ
ましたら萬じゆ
がかけよつて、
らうのとびら
に手をかけま
すと、「たれか。」と、
らうの中から



申しました。萬じゆはとびらのすきから手を入れて、

「おなつかしや、母様。木曽の萬じゆでござ
います。」

「何、萬じゆ。木曽の萬じゆか。」

と、親子は手を取合つて泣きました。やがて
うばをも呼入れて、三人は其の夜を
の中に明かしました。

これから後萬じゆは、うばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんしんしんして、石のらうからうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。二人がたがひに取りつき泣きに泣いた時には、頼朝をはじめ、居合

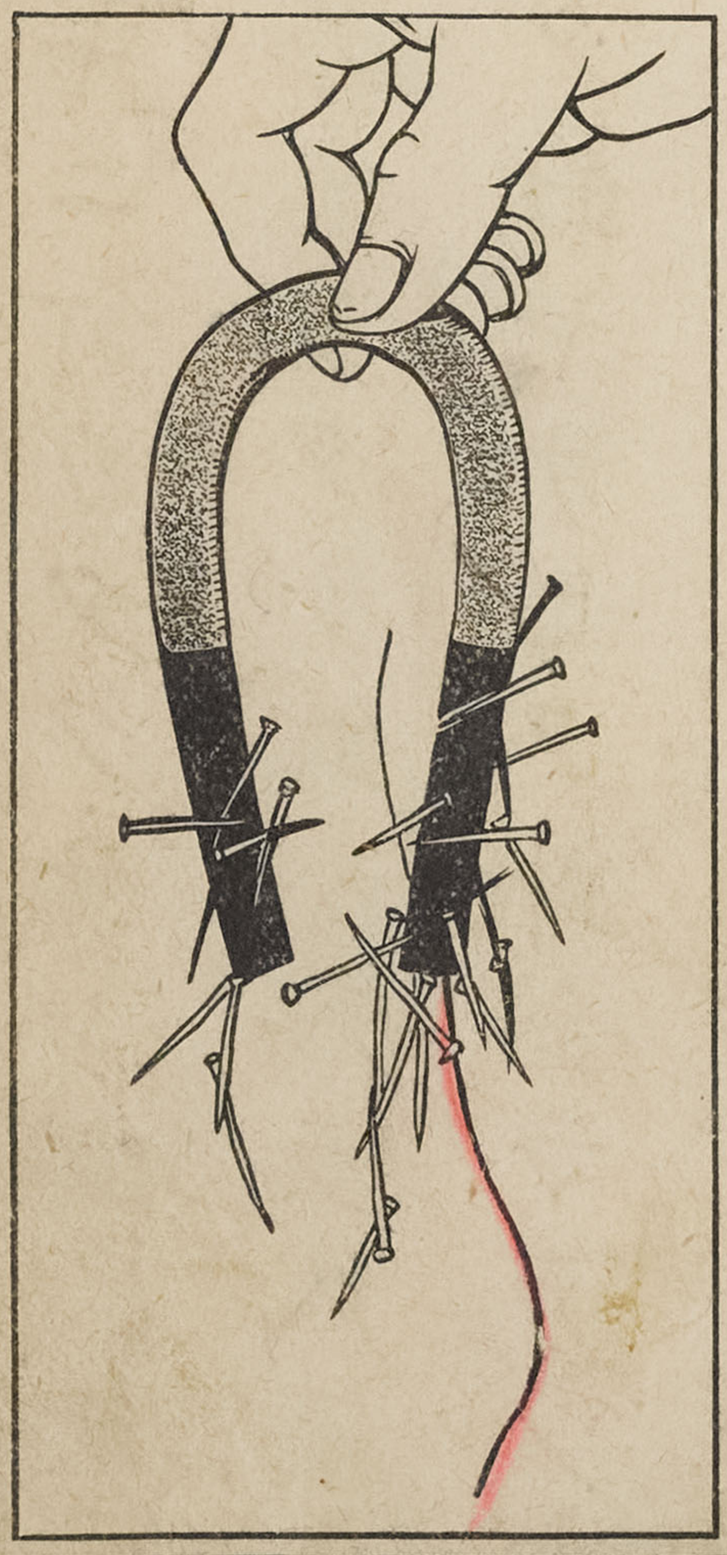
はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

頼朝は唐糸をゆるした上に、萬じゆにはたくさんなほうびをあたへましたので、親子は、うばもろともに、喜び勇んで木曽へ歸りました。

第十六　磁石

町ノ叔父サンカラ、オ年玉ニ大キナ磁石ヲ

イタバイタ。鐵ヲ引クカガ強イ。昨日ンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手テヰタ時、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒタ。僕ハ「待テ、待テ、待テ」ト。サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、トイツテ、磁石ヲ持ツテ來



果　殘　　青　　義捐

果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテ
キタ。二三返クリカヘシタラ、釘ハ殘ラズ取
レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツ
イテ來タ。

第十七　けんやくと義捐

或村に大火事があつて、一村ほとんど丸や
けになつた。其のとなり村の青年たちが見
かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。或物

持の所へ行くと、下男がまだ使
捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐ
た。青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。
「こまかな人だ。これではとてもお義捐はし
てくれまい」。
「さうかも知れない」。
さて主人に火事の話をして、義捐金のこと
をいひ出すと、

籾豆分途全言

「それはお氣の毒だ。」

と言つて、たくさん金を出したの種を分けて上げてもよいと言つた。其の歸り途で、青年たちは

「こまかな人だが、出す時にはよく出すね。」

「全くだ。あんなに小言を言ふ程だから、此の義捐が出來たのだらう。」

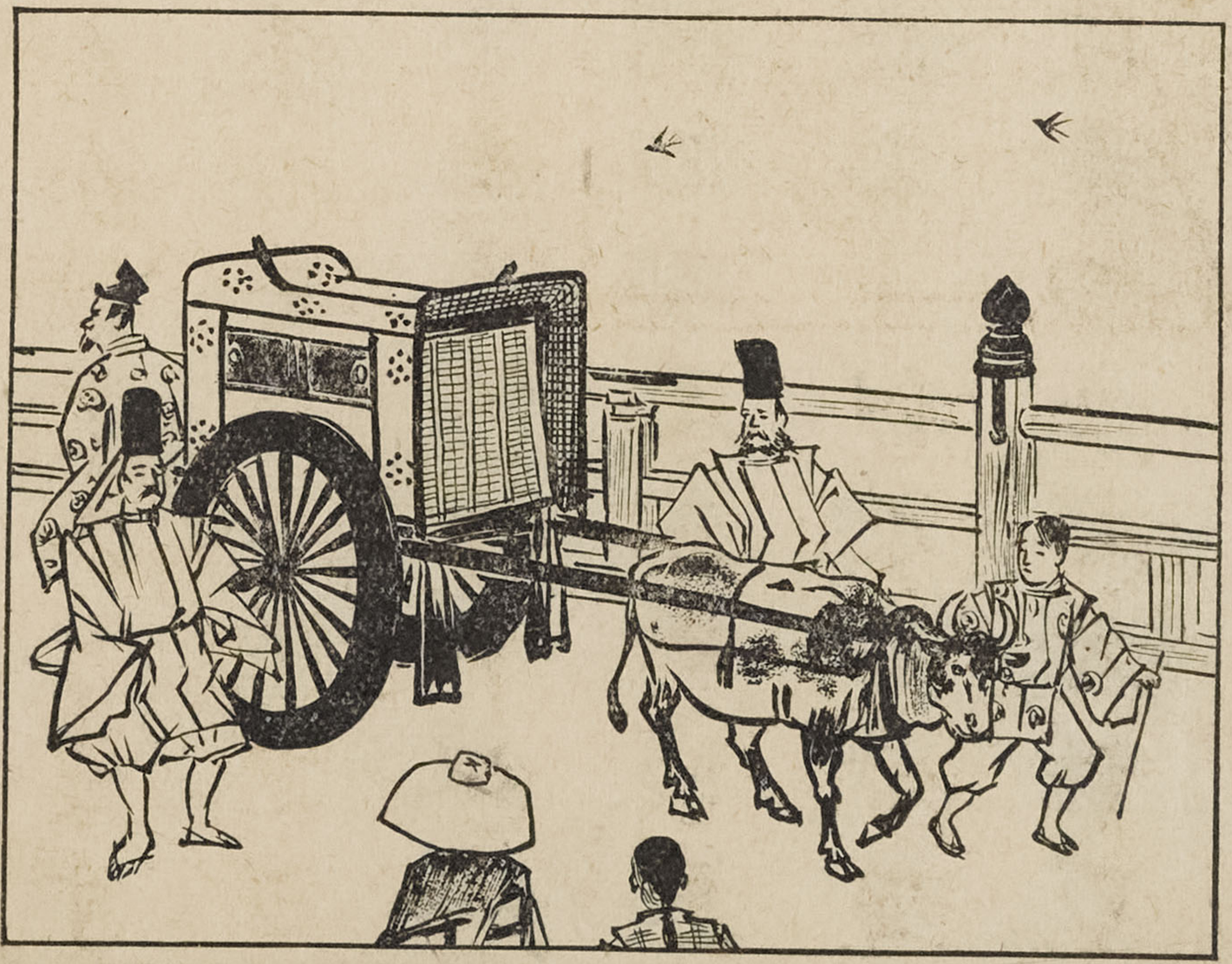
「さうだ、さうだ。」

といひ合つた。

第十八　賀茂川

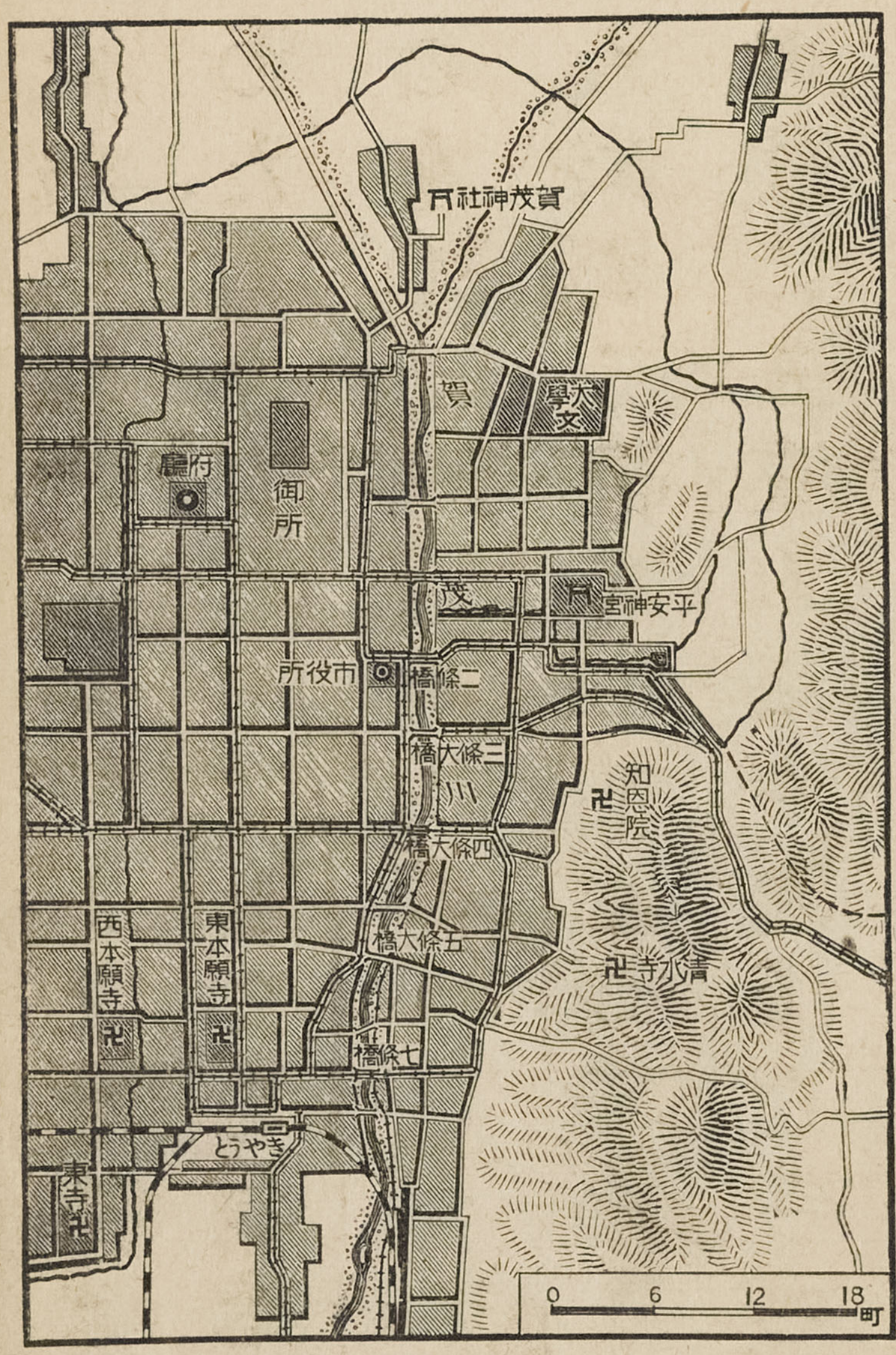
京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川（かも）といひます。京都は長い間の都ですから、冠（かんむり）をかぶつて太刀をはいたお姫様方や、きれいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。又いくさのあつ

た時には、よろひかぶとの勇ましい
した武士の刀や、なぎなたの光も、
となく此の川の水にうつつたことでござい
つつたことでございませう。こんな人、こんな姿
せう。こんな人、こんなましたが、川は昔のまゝに清
は、とうの昔にきえたが、川は昔のまゝに清
く美しく流れてゐます。」



致

賀茂川には橋がたくさんかけてあります。名高いのは三條（でう）・四條・五條の三つの橋でございます。今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。川の西は水のすぐそばから、すき間もなく



家が立ちならんでゐます。東のたもとから、川にそつて電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。義經辨慶の五條の大橋は此

の川下にかゝつてゐるのでございます。
又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠
く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の
山がかすんで見えます。
賀茂川は水が多くないので、船は通りませ
んが、其の代りに水がいたつてきれいで、染
物にむいてゐます。あの美しい友禅染は、も
と此の川べりで出來たのでございます。

第十九　メリンス

「春子、オ前ハ着物ノ地ハ何カ知ツテヰマスカ。」

「絹絲（キヌ）ト木綿（モメン）絲デス。」

「マダアリマス。」

「麻（アサ）絲。」

「マダアリマセウ。」

「毛絲デス。」



「サウ、ヨク知ツテ丼マシタ。毛絲デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。

「ラシヤトフランネルモサウデセウ。

「セルモサウデセウカ。

「ソレダケデスカ。

「サウデス。マダアリマスカ。

「モウ知リマセン」。

「ネエサンガ今ヌツテ丼ル此ノ帯ハ。

「ソレハメリンスデ、絹デセウ」。

「イヽエ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガガツカナイノデス」。

「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ」。

「コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、縮緬（チリメン）ノ友禪（イウゼン）ト同ジ

氷湖

デス。コレゴラン、表ダケデ、ウラノ方ハ染メテナイデセウ」。

第二十　氷すべり

二三日ひどく寒かつたので、湖の氷が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。今日は日曜日で、おまけに日本晴だ。湖の上は朝からひじやうな人出である。男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。先生も

第二十　氷すべり

西　靴　片





ねれば、軍人も人もねる。みんな氷靴を着けて、思ひ〳〵のすべり方をしてねる。

すべる〳〵、みんなすべる。片足でおそろしい程早くすべる者もあれば、人の手にすがつて、こは

ごはすべる者もあ
をやる者もあり、こ
ある。はた拾、まり送、お
てしまへば、少しも陸上とかはらない。

第二十一　神風

博多（はかた）の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつたけれども我が武士は、船の大小などは少しも氣にしなかつた。草野の次郎の

如きは夜敵の船に
つて、敵の船に火を
のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船を
つなぎ合はせた。まるで大きな島が出来た
やうなものである。
此の時河野の通有（みちあり）は、たつた小舟二そうで
向つた。敵ははげしく射立てた。味方ははばた
ばたとたふれた。通有も左のかたを射られ

たが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。いよ〳〵おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出來ない。通有はほばしらをたふして、之を



明實難

はしごにして、敵の船へをどりこんだ。味方は後からく〳〵とつゞいた。きんぐ〳〵に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。

其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよせて來るのは明らかである。實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

おそれ多くも亀山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おふ武士は必死のかくごでふせいのりになつた。武士といふも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海神のおぼしめしにかなつたのであつた。

はわきかへつた。敵
くだけて、敵兵は海の船はこつ
た。生きてかへつたもののそこに沈
つたといふ。者は數へる程しかなか
それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國
から攻められたことはない。

第二十二　象

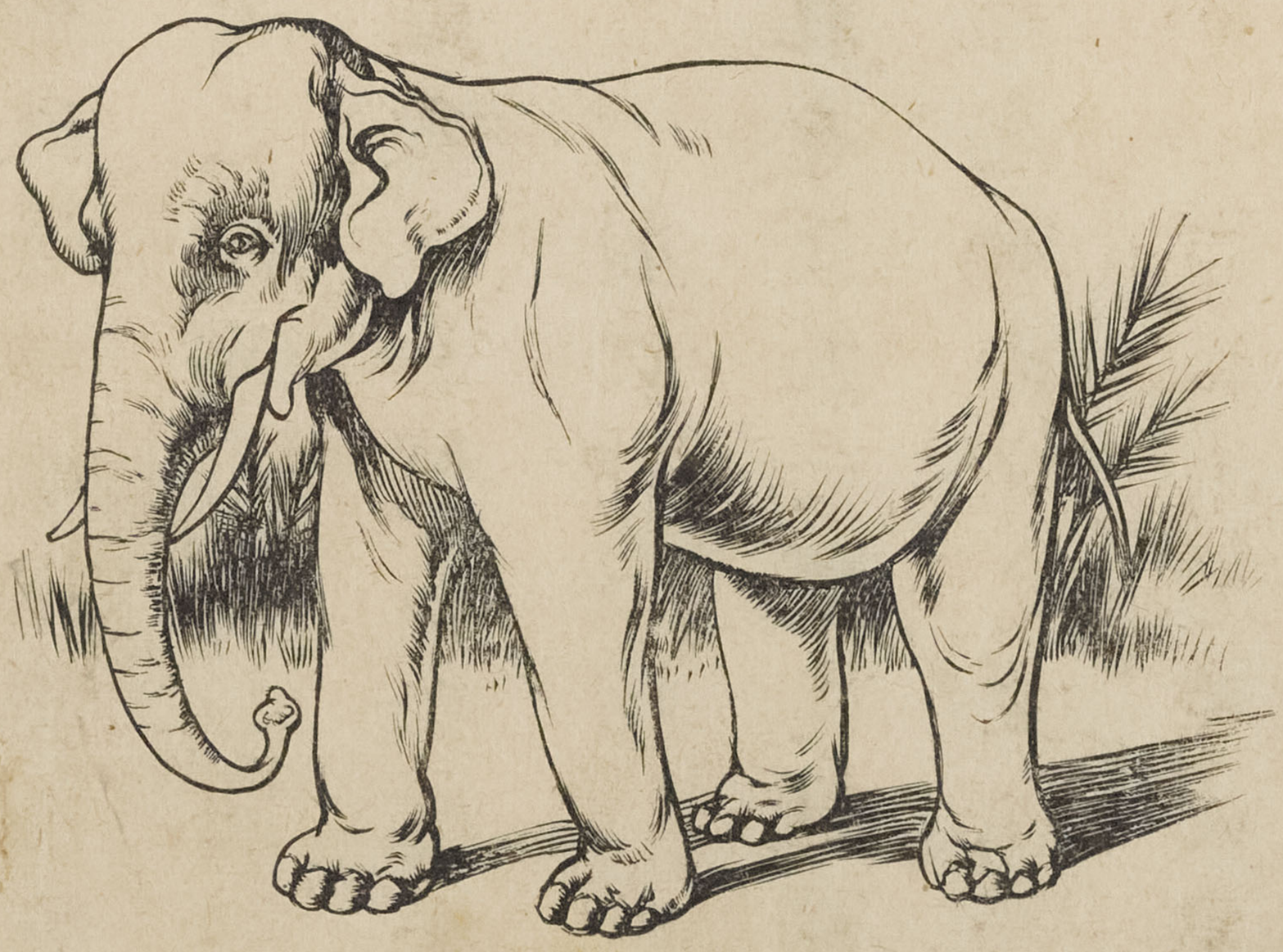
見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのにお

丈由　牙　切繪

どろいた。

ごかすことの出来る長い鼻、箕（み）のやうな耳、長い牙、小さな目、それから太い足、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

象つかひが乗つてゐ



て、口上をのべては、らつぱを吹かばんの上へ乗らせたり象が大きな桶を鼻で頭の上へまと、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。象がそれを下して置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。みんな手をうつてかつさいした。象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。

牙は象つかひの腕よりも太かつた。自分たち程の子どもがかけ出て來て、象の前足にだきついて見せた。子どもの手がやつと合つてゐた。象つかひが「此の太い足で、どさり〳〵と歩きます」。

といふと、長い鼻をぶら〳〵させて歩き出した。何だか地ひゞきでもするやうな氣がした。又

腹印守

「御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。なれますれば、おつうごございますので、おつうごの下でお晝ねをなさると申しますす。」

印度國はいたつてあつたうちの國六

「御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。なれますれば、おつうごございますので、おつうごの下でお晝ねをなさると申しますす。」

印度國はいたつてあつたうちの國六

第二十三　象の鼻で、其所にあつたうち

はを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

の時、「大きなお守さんだ。」

と誰かがいつたので、みんながどつと一度にふき出した。

第二十三　千早城

楠木正成（くすのきまさしげ）が守つた千早城は、けはしい金剛山（こんがうざん）上にはあるが、まはりが一里にも足らず、

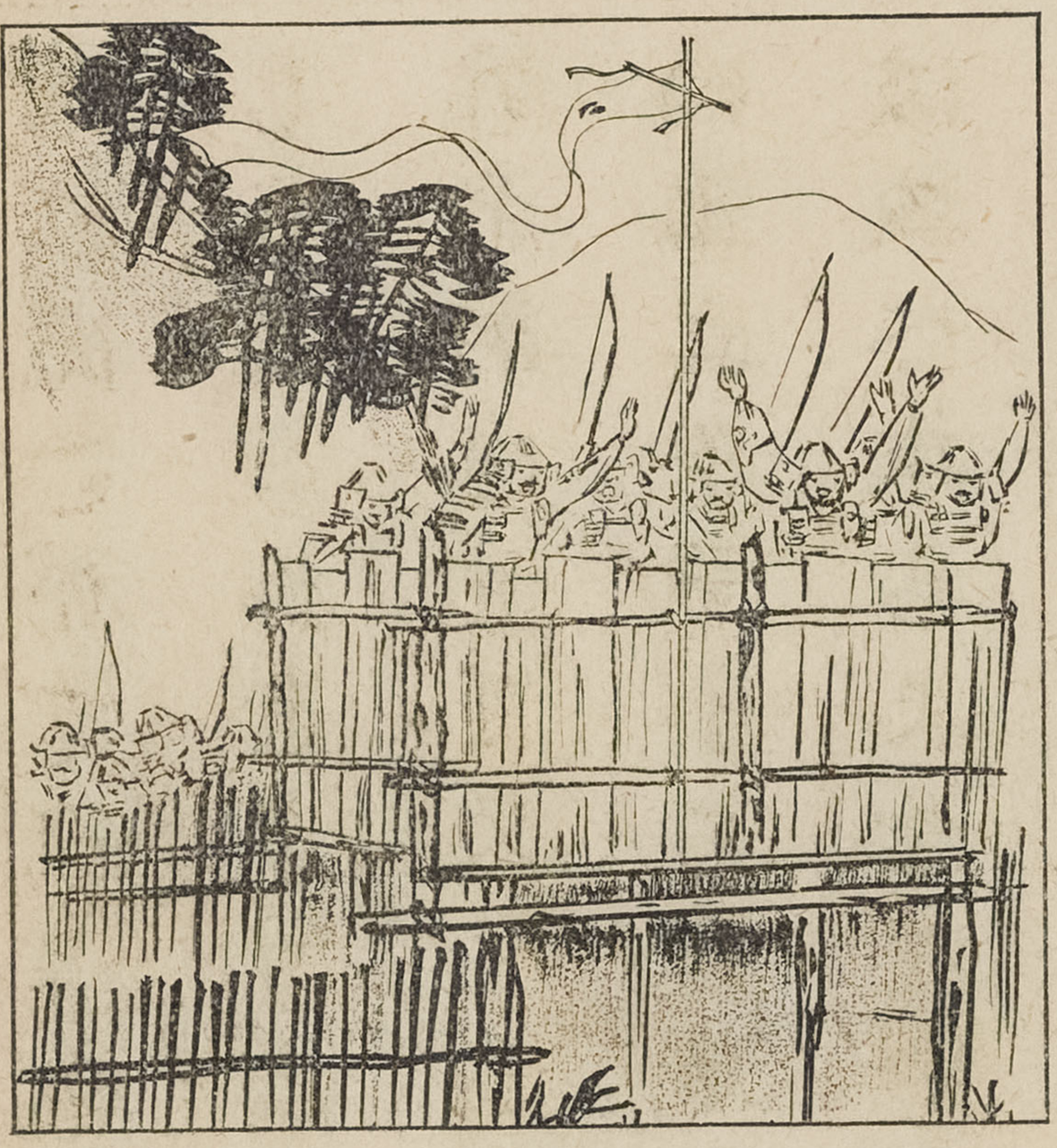
總勢（そうぜい）わづか千人ばかり。之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻め上ると、城の上やぐらから大きな石を投落して、賊のさわやぐ所をさんざんに射た。賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

來汲

これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに來られないやうにした。城中にはまだ十分水の用意がしてあつた。二日たつても三日たつて





悪旗

も汲みに来ない。番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をとりばつて引上げた。

正成は此の旗を城門に立てて、さんぐに賊を悪口させた。賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正

餘聲

成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。城兵はさつと引上げ

たが、二三十人はふみとゞまつた。
から之を目がけておしよせると、城から大
石を四五十、一度に落したので、又何百人か
ころされた。ふみとゞまつてゐたのは、みん
な藁人形（わらにんぎやう）であつた。賊はうまくはかられた
のである。
もう此の上は、しやにむに攻落さうといふ
ので、賊は大きなはしごを作つて、之を城の

堀に渡して橋にした。廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。今度こそは千早城もあやふく見えた。すると正成は、何時の間に用意して置いたか、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。さうして其の上へ油をふりかけさせた。橋はまん中から燃え切れて、谷そこへどうと落ちた。又賊は何千人か

死傷した。

賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。百騎にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、殘少になつて退いた。

正成は實にえらい人である。

第二十四　記念の木

村の學校のげんくわんの向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戰死した。

あの學校がたつた時、うちの畠にあつたのを死んだあの子が掘取つて、

かついで行つて植ゑたのだ。

あの子は十二、落葉松は

あの子のせいより低かつた。

それが今では學校の

二階のまどにとゞいてる。

あの子がいくさに行く時に、

學校の前でふりかへり、

「わたしの植ゑた落葉松が

あんなに高くなりました。

昨日學校で校長に、

あの木の事を話したら、

はじめて聞いた記念の木、

大事にするとおつしやつた。

第二十五　芽

「雨々々暖になつて、よいあんばいです。」

と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる

芽

時、私は庭へ出ました。雨あがりの庭はぼう
つとけむつてゐました。
池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指
程に芽を出してゐました。うちの人はみん
な知らずに居るから、一つ取つて行つて見
せようと思つて、手を出すと、
「義一さん、それはお節供に使ふのですよ。
といふねえさんの聲がしました。ねえさん

は赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいつた。かしはもちをこしらへていただいた。こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

拜參宮

第二十六　伊勢參宮

一　入營中の兄へ

其の後おさはりもございませんか。おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢（いせ）參宮に立たれました。參拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。うちにも、かは

老　　參｜外｜午

つた事はありません。

三月十八日

兄上樣　　千太

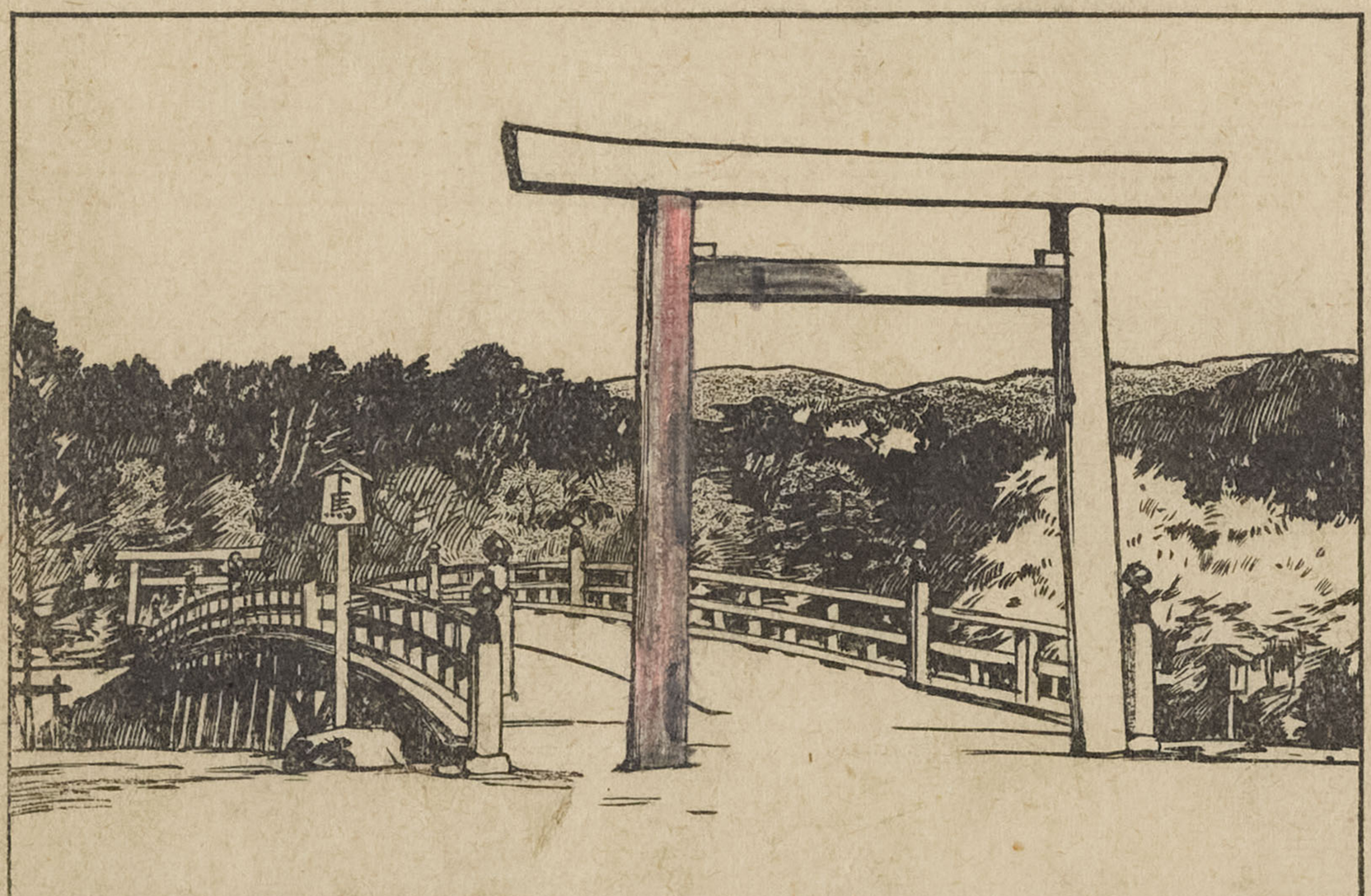
二

父から

昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ參り、今日内宮へ參つた。宇治橋（ばし）を渡つて神苑（しんゑん）に入り、千年も經つたかと思ふ老木の下へ行つ

た時には、何と
て、一そうあり
がたくかんじ
た。

御門の前でう
やうやしく拜
禮してから、神
殿の御もやう



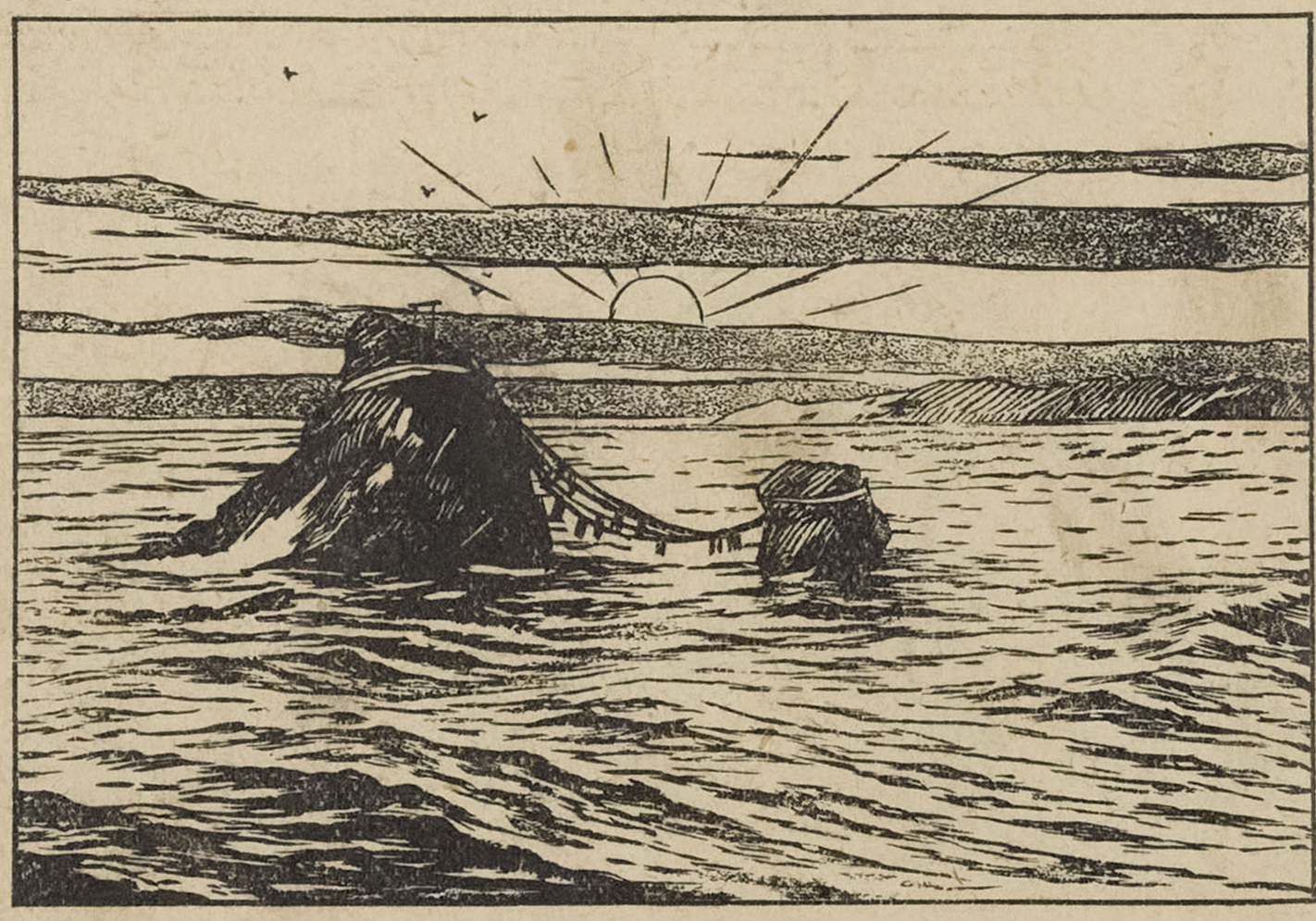
棟



は千木が置いてある。何のかざりを拜した。一切白木造で、お屋根はかやでふいてある。棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしに

もない御神殿を
拜して、まことに
おそれ多い氣が
した。

參拜をすましてから、二見浦（ふたみがうら）を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。ここはさないやうにして持つ



て歸る。

夕方京都へ立つ。

三月十九日　父から

千太どの

をはり

国立国語研究所
1002363115

大正九年三月八日翻刻印刷
大正九年五月三十日翻刻發行

尋常小學國語讀本卷六
定價金九錢
臨時定價金拾參錢

大正九年四月十日
文部省檢查濟

著作權所有

著作兼發行者
文部省

翻刻發行兼印刷者
東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社
代表者
石川正作

印刷所
東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

發賣所
東京市麹町區飯田町一丁目二三番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

.0
24
3115